歴史文化館ニュース　第７号

２０１２．５．２８

星が丘キャンパスへ大学移転５０周年と椙山歴史文化館

椙山歴史文化館館長　椙山美恵子

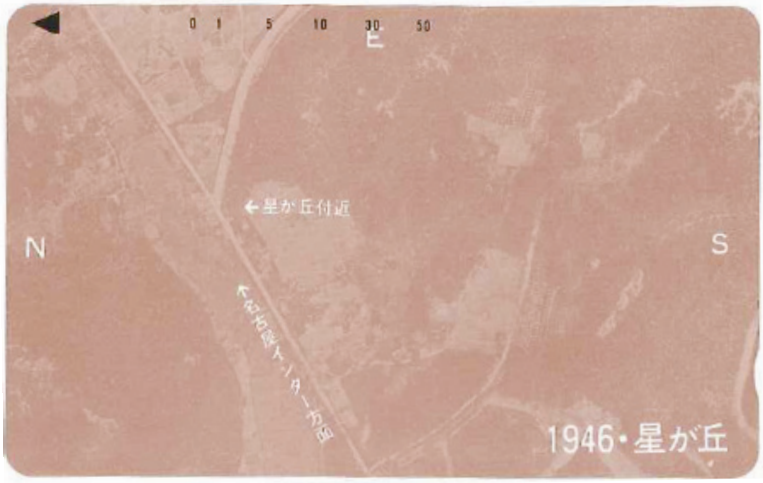
今年は椙山女学園大学が星が丘へ移設して５０年目の年です。節目の今年、歴史文化館では、人間関係学部設立２５周年でもあることもふまえ、企画展「モノとデジタルアーカイブ」の大部分は旧家政学部（大学の最初の学部）と人間関係学部に関係する「モノ」を材料にした展示となっています。

この展示の中には、家政学部が山添キャンパス（現在の中・高）にあった頃の学部の校舎や実験室の写真があります。校舎は現在の山添中・高キャンパスの正門から左にロータリーを辿った所（現在の通用門の付近）にありました。星が丘（当時は田代町瓶杁）に移転したのは昭和 37 年ですが、その頃の星が丘は今とは全く異なっていました。その姿は創設者椙山正弓氏が遺した碑「人間橋由来記」の文から窺い知ることができます。

「このあたり一帯の地は尾張藩累代の御猟場であった。中でもこの富士見台はここに隣れる雪見台、御殿山などと共に最も遠望のきく景勝の地点で、藩主最愛の休憩所のあったところと伝えられている。本学が建設せられる数年前までは、当地方としては珍しい昔ながらの鬱蒼たる深山であった・・・・」

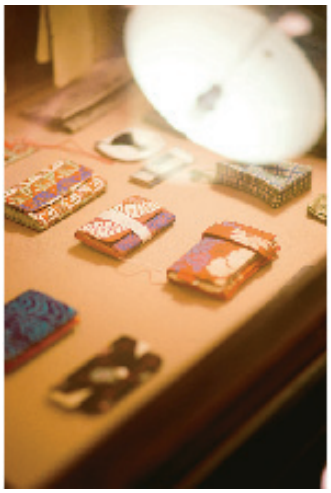
そして５０年を経て星が丘は賑やかな町になりました。家政学部のみで始まった椙山女学園大学も今や７つの学部を有する大学に発展しました。創設者・椙山正弓氏は、「人間橋由来記」の碑を遺して移転２年後に亡くなられましたが、星が丘界隈の変化と大学の発展ぶりを空の上から感慨深く見ておられることでしょう。

ここに添えた３枚の写真は最近寄贈されたテレホンカードです。写真の詳細については現時点ではまだ未調査ですが、見比べると星が丘の変化の様子がよく分かります。５０年前は「・・鬱蒼たる深山であった・・」という雰囲気が伝わってきます。



椙山女学園は明治３８年に富士塚町（現在の高岳近辺）から始まり、その後山添町に移り、さらに大学のみが星が丘（２５年前から日進市に人間関係学部）に移転しました。「椙山歴史文化館」には創立以来の１０７年間の資料が展示されていますので、大学移転５０年のこの機会に、館内でそれぞれの時代の椙山を感じていただければと思います。

【正弐記念室トピックス】　　＜今子制作小物入れ＞



今子は端切れ布で財布や小銭入れ、櫛ケースにいたるまでさまざまなタイプの小物入れを作成しました。正弐記念室には今でも充分使えるほどの完成度の高い色とりどりの小物入れが約 50 点展示されており、同じケースの中には、小物入れに対応した手作りの型紙も並んでいます。また、展示兼保管ケースとして実際に正弐・今子が使用していた桐箪笥の中には当時の端切れ布や糸、留め具など小物入れを作成するために必要な裁縫道具などが納められており、今ではどれも大変貴重な資料となっています。

また、歴史展示室には制作過程の小物入れなどの展示もあり、これらの資料から今子が生徒に教授する当時の姿が偲ばれます。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜ワークショップ「椙女（すぎじょ）になろう」＞

～今子先生の小物入れから広がる楽しみと学び～

椙山歴史文化館専門員　宮下　十有（文化情報学部講師）

文化情報学部の宮下ゼミでは、3 年生後期の「卒業研究指導１」において、ゼミ生自身の課題を設定し、半年間取り組みました。内容はダンスや音楽、絵画鑑賞などのゼミ生によるワークショップや、映像作品の発表など多岐に渡りました。「椙女（すぎじょ）になろう」と銘打ったワークショップの発案実施者は岩崎さくらさん、小野寺翔子さん。二人は、ゼミで椙山歴史文化館の見学後、意見をまとめ、歴史文化館の展示についての提案を行いました。提案に対して丁寧にご対応いただいたことから、彼女たちの歴史文化館への想いがより深まりました。

学生にとって、足を運ぶことが少ない歴史文化館。どうしたらその魅力を伝え、椙山女学園の歴史とここで学ぶ自分とのつながりを形成できるか？彼女たちは、その後も何度も足を運び、歴史文化館を知るなかで、特に正弐記念室に展示されていた今子先生の小物入れに強く惹かれます。そして、「椙女になろう」ワークショップを企画し、実践を試みました。

ワークショップの企画過程で、今子先生の小物入れは、一見見落とされがちでも、じっくり見ると心惹かれるということ、また他のワークショップから、タイトルの重要性にも気づきました。

ゼミを巻き込んだ試行錯誤の結果、「1. 歴史文化館の大浦さんによる小物入れと型紙、生地の解説 2. 実物資料をじっくり観察、必要に応じて写真で記録 3. 観察記録と写真情報に基づき、ワークシートに未完成の作品や、型

紙、完成品から想像した「今子先生の小物入れイメージ図」を自由に描く。4. 参加者でデザインやイメージ、考えたことを共有する。」という内容です。ワークショップに参加したゼミ生は実物資料を前にマスク、手袋を装着して、丁寧に資料を観察、発見し、想像や感想を共有しました。今子先生の器用な造作に感動し、デザインに共感しました。

今子先生の小物入れとワークショップは、あふれんばかりのデジタル情報を浮遊している彼女たちに、立ち止まってモノに向き合う貴重な時間になりました。さらに、時間を越えて今子先生の若々しいセンスに共感し、歴史文化館が「過去の歴史と今が出会い、つながる場」、「椙女になる場」であることを実感しました。

＊＊＊

【歴史の窓】　　＜伊　藤　清　永＞

２０１２年２月８日～２月２６日の会期で、松坂屋美術館に於いて「生誕１００年　伊藤清永展」が開催されました。その中で「椙山高女付近」（１９２６（大正１５）年）という当時の椙山第二高等女学校（現山添キャンパス）の校舎が描かれた作品が展示されました。（他に「高等女学校」／同年）という作品が展示されました。）

伊藤清永は１９１１（明治４４）年、兵庫県の出石町に生まれ、１９２３（大正１２）年、名古屋の曹洞宗第三中学林（現愛知中学校）へ入学し、後に上京して東京美術学校に進みます。その後、洋画家として、日展審査員を務めるなど数々の活躍をし、１９９６（平成８）年文化勲章を受けます。日本を代表する洋画家が、大正時代、名古屋に進学していた時に描いたと思われるものが上記の作品であり、作品を通じた椙山女学園との繋がりを伝えています。

＜大学探検について＞

教育学部非常勤講師　中村太貴生

教育学部の授業「生活指導方法」の中で大学探検という活動を行っている。小学校１・２年生を対象とする教科、生活科は、自分や自分の周りの世界の良さに気付く活動を重視している。探検活動はそれを踏まえて行っている子どもたちが自分の生活圏において未知なるものを実際に探し、発見していく活動である。この活動を通して子どもたちの知的好奇心、対象に働き掛ける態度、発見する喜び、新たな活動への意欲などを育むことが期待されるので、探検活動は生活科の主要な活動の一つになっている。大学探検とは、この探検学習の意義、特色、単元構成、授業構成、授業実践を想定しながら、学生が梱大のキャンパスを探検して、目に止まったもの、印象に残ったこと、発見したことなどを「大学魅力発見」「梱大名所」「梱大探査」等と題してレポートするものである。探検対象は自由だが、梱山歴史文化館は必ず見ることとしている。

＊＊＊

＜梱山歴史文化館企画展「モノとデジタルアーカイブ：その現実と実際」によせて＞

梱山歴史文化館専門委員　杉藤重信（人間関係学部教授）

梱山歴史文化館企画展「モノとデジタルアーカイブーその現実と実際」にいたる経緯についてご紹介し、あわせて、本企画展の趣旨と内容についてご説明申し上げます。

発端は、２００４年頃、DNPの「アルシーブ」という施設を訪ねたことです。この施設は、博物館収蔵品や歴史遺産をデジタルアーカイブするという実験的施設でした。「デジタルアーカイブ」という和製英語を作ったのは月岡嘉男氏（東京大学名誉教授）で、「有形・無形の文化資産をデジタル情報の形で記録し、その情報をデータベース化して保管し、随時閲覧・鑑賞、情報ネットワークを利用して情報発信」をすることが現代の重要課題であるとし、そのための方法を総合して「デジタルアーカイブ」と述べ、この施設はその提言を実現しようとしていました。

２００９年６月に梱山歴史文化館が発足し、学園の歴史的遺産を保存する体制が整いました。しかし、現物資料は増え続け、展示室や収蔵庫のサイズからして、展示や保存の限界があります。所蔵品を画像資料としてデジタル化し、学園史資料の記録と教育の場とし、同時にネットワークを通じて学園の歴史と現状を発信する場が必要であるとして、平成22年度末に「デジタルアーカイブ研究会」が発足しました。その成果の一部が本企画展「モノとデジタルアーカイブーその現実と実際」です。

企画展は三つのコーナーで構成されています。まず、雛形資料についてです。皆様方には雛形資料の整理からデジタル化までのプロセスをごらんいただきます。続いて、人間関係学部の心理学実験器具をごらんいただきます。特に、「見る」ことに焦点をあてました。学部は創設25年を迎え、機器も大きく変化してきています。その変化も合わせてごらんください。最後に、生活科学部の被服材料学の実験器具です。これは、中山晃名誉教授の手作りの器具で、退職にあたり、ご寄付いただいたものです。こうした、現物をどのようにデジタル化するのか、３Ｄ化の試みも併せてご覧ください。

「デジタルアーカイブ展」のご案内

会期：平成２４年３月２８日（水）～６月２９日（金）／毎週水曜・金曜開館、１０時～１７時、入場無料
会場：椙山歴史文化館文化展示室（椙山女学園大学図書館４Ｆ）

椙山歴史文化館企画展「デジタルアーカイブ展」連動企画（連続トークセッション）

５月３０日（水）:「モノは語る：被服材料学実験器具に関連して」　中山　晃（椙山女学園大学名誉教授）
被服材料学のための手作り実験器具の製作者である中山晃名誉教授により、 実験器具の製作や実験、器具にまつわるお話、あわせて、星が丘キャンパスの歴史についてお聞きします。

６月　６日（水）:「見るということ：展示を通して考える」　増井　透（人間関係学部教授）
三木邦弘（現代マネジメント学部准教授）
心理学実験道具にみられる「視覚」への興味と、視覚情報のデジタルアーカイブ、展示で使われる３Ｄ技術などから見ること、記録すること、見せることを心理学、情報工学の立場からお聞きします。

６月１３日（水）:「雛形：椙山の裁縫教育について」　中保淑子（椙山女学園大学名誉教授）
名古屋裁縫女学校からはじまる裁縫教育の教材として制作された雛形。
雛形研究会が中心となる雛形研究から見えてくる椙山の教育方針と教育の歴史について、お聞きします。

全３回トータルコーディネーター：杉藤重信（人間関係学部教授）
時間●１３：２０～１４：５０（座談会１時間＋ギャラリートーク３０分）
会場●座談会（１３：２０～１４：２０）椙山女学園大学図書館３Ｆ閲覧室
ギャラリートーク（１４：２０～１４：５０）椙山女学園大学図書館４Ｆ歴史文化館　　入場無料

【寄贈品紹介】

小学校制服
（冬）ジャケット、スカート（３号及び５号）
（夏）半袖ブラウス（７号）
（以上、森川博文氏寄贈）
高等学校制服一式、半袖、長袖ブラウス（各１点）、トッパーコート
（以上、堤仁美氏寄贈）
椙山正弌氏遺品類１５７点
（ねじ巻き式掛時計、火災保険証券、山添校地区画整理関係書類、その他寄贈未手続きの遺品類等々）
椙山女学園関係記念テレフォンカード２９枚
学校法人渡辺学園記念図書カード２枚
（以上、椙山正弘氏寄贈）
風鎮　（大浦詔子氏寄贈）
教科書１５冊（明治～大正時代）　（前田健氏寄贈）
海老茶の行灯袴雛形模型（ガラス瓶入り）
（大橋昌代氏寄贈）

貼り交ぜ屏風（椙山正弌氏古稀祝）
椙山正弌氏遺品

編集後記

今年はロンドンオリンピックが開催されますが、そのオリンピックが開催される年に、必ず注目される卒業生が、１９３６（昭和１１）年、ドイツのベルリンオリンピックで活躍し金メダルを取った前畑秀子氏です。

既に昨年から、多くの関係者より取材があり、岐阜新聞、愛知県史（資料編３５）への記載や文化情報学部制作の映像作品（歴史文化館シリーズ）の発表等々があり、卒業生の輝かしい足跡を伝えています。

歴史文化館ニュース　第７号
発　行　日　２０１２（平成２４年）５月２８日
編集・発行　椙山歴史文化館
名古屋市千種区星が丘元町１７番３号
大学図書館４Ｆ
ＴＥＬ　０５２（７８１）１１８６（代）
０５２（７８１）４５９０（直）
編集担当者　椙山美恵子　村瀬輝恭　河路峰雄　柘植あい